

『障害者武道の発展を願って！』



**障害者武道協会 副代表理事
大橋 千秋氏(世界拳法会連盟会長)**

●プロフィール 昭和23年6月30日生、愛知県名古屋出身。名城大S.46卒。錬成会館にて中野館長の師事を受ける。「蹴りの大橋」と異名をとる。武道をこよなく愛することにより名工高にて長嶺耕史師範(名城大学39年卒)に会い剣道に打ち込む、長嶺師範の影響もありS.42年に名城大学に進み愛知県警谷籙吉郎師範の師事を受ける。S.44年ごろスランプに陥り、あらゆる努力をするが選手として低迷し苦悩の末、野に下り静岡県浜松市の企業に就職し趣味とし稽古するが「勝ちへの執着が薄れたことから・無心となり」再び開眼、柔道出身の故朝倉邦夫師範と共に激しい稽古に挑む。スランプがもとで断念した武道魂が、再燃！一念発起し退職し活躍の場所を世界に求める。(苦悩低迷時代があったゆえに、武道バカにならず！真理が見えたと言う。)S.49年、1年間の猛稽古の後、S.50～S.51故榊原清司師範と共に豪・NZなど各国に渡り異種格闘技と真剣勝負を行い無敗、当時、オーストラリアで同じように実力主義で柔道、富士流護身術を広めていた武道家で牛島辰熊師範の師事を受けた中島たけし師範(現・国士舘大学教授)と出会い、オーストラリアtas警察士官学校でともに指導・稽古をしながら日本武道と文化を紹介する。帰国後、東海地区本部長を経て全日本拳法会本部長に就任し現役引退後は、自分が得たものを子供たちや青少年に伝えたいと指導にあたっている。剣道、居合道など武道を愛し家族全員が拳法、剣道を稽古をし、楽しんでいる。故・榊原清司師範が「奥さんや子供たち家族で稽古できる幸せな男」と称した。青少年「武徳教育」のため静岡大学の非常勤講師や講演活動もし 静岡県日本・ニュージーランド協会、日本・オーストラリア協会の会長でもある。全国CC緑化協会最高顧問も務める。オーストラリアTas警察士官学校にてコースNo.5、No.6指導しニュージーランドに渡り指導、ケビン・ハット師範と互いに「kyodai」と呼び合う国際派であるとともにこわれて企業、行政の講演の講師も務める教育派でもある。2005年3月24日フランスにおいて世界拳法会連盟より最高段位・九段が授与された。

今回ほど「道しるべ」にふさわしい人はいないのではないだろうか…。

武道を通して地域の方々に貢献され、また世界でも活躍され、多くの外国人に慕われ敬愛されている。子ども、大人、障害者を問わずあらゆる人々に武士道という哲学と武術を教え、魂をゆさぶる教育を実践してこられた。その大橋千秋氏に「障害者武道協会」の活動内容と武士道の真髓についてお聞きした。

◇障害者武道協会設立までの経緯について

障害者武道協会は、平成21年5月に一般社団法人として設立しました。代表理事は国士舘大学の中島多木教授で、副代表理事は国際武道大学の松井完太郎教授と私が務めています。第1回総会は、平成21年8月9日、浜松市武道館において開催しました。

障害者武道というのは、「競技」としての障害者武道と障害者の「自立・リハビリテーション」としての障害者武道、この2つのジャンルに分けられます。障害者武道の「競技」では、第3回全国視覚障害者学生柔道大会(H.22.7.31 浜松市武道館)第6回全日本障害者空手道競技大会(H.22.9.25 東京スポーツ文化館)が恒例で開催されておりますが、全日本視覚障害者武道大会が25回を数え、他と比較しても歴史は長くありません。一方、「自立・リハビリテーション」は、村井正直博士が1966年、イギリスでボバース法の勉強中に脊髄脳性麻痺の少年から「柔道療育」の効果があると確信し、社会福祉法人わらしべ園で実践されてきました。また、北欧スウェーデンのポントス・ジョハンソン先生も自身が障害者でしたが武道により歩行が可能になり「国際障害者武道連盟」を設立し普及活動を行っております。

◇最近の活動等について

障害者武道の将来を考えようと、日本各地で柔道療法などに取り組んでおります。9月11日には、枚方市の重度身体障害者更生施設「わらしべ園」で会合を開き、当協会の中島代表理事を中心に

スウェーデンのポントス・ジョハンソン先生も参加し、障害児教育に携わる教員や医師達が活発に意見交換を行いました。わらしべ園では先ほどの村井正直医師が約30年前から、身障者のリハビリに柔道療法を取り入れ、指導を続けていた訳ですが、6年前に中島教授が村井医師の取り組みに着目し活動を開始しました。更に、これまで各施設で独自に行われてきた療法をお互いに知ること、共通のスタイルを見出そうと考えた訳です。また、9月25日には、第6回全日本障害者空手道競技大会を東京スポーツ文化館で開催されました。障害者の空手道愛好者にも健常者と同じように日ごろの練習の成果を試す場を提供するために開催された訳です。午前中に選手と審判員全員による研修会が行われ、準備体操、基本錬成、区分練習で汗をかき、午後から競技が始まり、各階級で熱戦が繰り広げられました。今大会は昨年より多い120名が出場したそうです。

◇指導や活動を通して見えてきたこと

空手道も障害者の大会があります。その中で例えば目がみえなくて打撃系の武道が出来るかどうか。殴ったり蹴ったりというのは、中々難しいが、目隠しをして、実際にやってみて意外と出来るということが最近わかってきました。柔道は組んで行うので分かりやすいのですが、やはりそれに近い形でルールを覚えれば、健常者も目のみえない方も一緒に稽古が可能です。更にもっと分かったことは大学等で行っている伝統的空手というものよりも極真空手や我々みたいに打撃系で投げ技、寝技などあるほうが意外とやれるということが分かってきました。的の小さい顔を突くというのは、中々出来ないのですが、相手と触れている中で、接近してくると道着の音、或いは動き、気配、風の流れ等を感じ取ることで意外と分かるものなのです。蹴って足が顔の傍に来ている時に目隠しされている人は、よけていると松井完太郎教授の学会での発表例もあります。剣道では片手がない方が関東で活躍し全日本にも出場したと聞いています。“片手がないと、コテを打たれなくても済むので障害者のほうが有利だ”という冗談のような話もあります。

先日、京都大学で行われた応用心理学会で、わらしべ園の東先生が“道着を着ると自分が強くなったという自尊心が芽生える”という道着効果について発表されました。例えば日本刀がありません、切れない日本刀ではなく真剣を障害者の方

に持たせてあげると本当の「サムライ」になったという気持ちになるようです。やはり京都大学の田中教授も報告されておりましたように、この効果については障害者だけではなく健常者にも又、子ども達を教育する上でも役立つということです。しかも、外国人が柔道着や空手着を着て練習するだけで、“自分は強くなった、自分は違うんだ”という自尊心が生まれます。先ほどの東先生が京都大学で発表していましたが、重度の障害者で精神的な障害を持った女性の方に柔道を教え、投げられたり技の練習をすることで何が違ってくるかといえば、今までは何かあったら直ぐに切れて喧嘩ばかりしていた人が“私にそんなことを言っていると私は恐いよ、私は柔道をやっているから”という自尊心が生れてきたことが一つの大きな進歩ではなかったか、ということを応用心理学会で発表されました。

障害者に対する関心はだんだん高まっていることは確かです。しかしながら、障害者という言葉があること自体が差別的ですし、スウェーデンのように「障害者の特権です」と言えるような“障害はメリットでもあり自分達のプラスなんだと思える社会環境づくり”、例えば剣道で“片手がないから俺は有利なんだ”と言えるようなところのものが、社会の中に根づくことができれば一番良いのではないかと思っている訳です。

◇武道の世界的な広がりについて

「武道」という言葉は、「お寿司」「お酒」「サムライ」と同じぐらいに世界に知れわたっています。武道というのは、簡単に言えば、相手を殺すための技術だった訳です。要するに、その技術というのが武術です。戦場に行って殺しあうのですから荒くれ者の集まりでした。しかしながら規律をしっかりと守ってはいけなかった。また究極の命をかけて戦っていますから、その中でいろんな哲学が生まれ、武士道という哲学になりました。『ラストサムライ』という映画がありましたが、観客は武道イコール武士道と観ています。自分を律するための究極の武士の営為が即ち武士道であり、哲学となったというのが世界の常識になっている訳です。

実は以前、ネパールに呼ばれて講演を行ってききましたが、主催者に「日本人、サムライは正直である、正直なことは命より大切だということを教えてもらいたい。正直であることを話してもらいたい」と言われました。日本の武士は、嘘をついたり、悪いことをしたり、辱しめを受けたりすると自分で腹を切る、命よりも重たい。それぐらい名誉を重んじてい

☆障害者武道の発展を願って！

る。いかに「サムライ」というのは命よりも正直さを大切にしているということをお話してもらいたいということでした。

話は変わりますが、こういう歴史的事実がありました。明治の初め、今から120年くらい前、トルコの軍艦が和歌山県の大島沖で座礁しました。軍艦が沈没した。和歌山県の漁民たちは、海に飛び込んで、何人かのトルコ人を救い上げました。その時代は貧しくて、ちゃんとした服を着ている人もあまりいないぐらいでしたが、自分達の着ているものを与え大切な豚や鶏をつぶして食べさせたりいろいろ助けた訳です。武士は特権階級でしたから、みんなの憧れで、漁民たちにもそういう精神が十分行き届いていたんですね。明治天皇が、食べるものにも事欠いている人たちだから、よく頑張ったとお金をあげた訳です。すると、その貰ったお金をトルコの人たちに「これでお国に帰りなさい。足しにしてください」と。トルコの人たちは日本の軍艦に乘せられてトルコに送り届けられた訳です。それがトルコの教科書に載っているのです。時が過ぎて現在になって、イランイラク戦争が勃発しました。ところが制空権がイラク軍に制覇され、戦闘状態になっていて、飛行機は飛べない。イランに300人近くの日本人が残っていました。誰も救出できない、風前の灯という時にトルコのジェット旅客機2機が助けに来て日本人を乗せて飛び立ち、制空権を脱出した時に「我々は今から90何年前に受けた恩を忘れてはおりません」というアナウンスが流れる訳です。一方、イランには未だトルコ人たち6千人位が残されていて、彼らはみんな徒歩で脱出しました。しかし、誰一人その行為に対して悪くいう人はいなかったそうです。

こうやってトルコの国にも武士道の精神が伝わっているのです。これほどまでに世界の皆さんから崇拜され憧れられる武士道ですから、武道の拡大と同じように障害者武道も広がっていく可能性があるということでしょう。

◇世界拳法会連盟と地域での活動

世界拳法会連盟は、全世界に武道・拳法会を媒介とし武徳と武士道を普及する団体です。知育・体育・徳育を軸とし幼年部から一般シニアに至るまでの武徳教育を行っています。また、大志を持つことを常とし「著眼高ければ、すなわち理(利)を見て岐せず」と訓え不動心を養っています。

拳法会では、「育てサムライ！」「徳育なくして真の教育なく！武徳なくして真の武道なし！」と銘打っ

て「武道教育＝武士道教育」に重点をおき寺子屋拳法会と称されてもいます。共通して言える



ことは、生徒の「武徳・礼徳」の向上です。控えの生徒や履物の整理整頓が物語っています。もちろん、体育能力も向上し精神的に強くなっている事も確信できます。しかし、なんと言っても第一は、「家庭での教育」で第二は、「学校での教育」です。私たち拳法会は、第三の「地域での教育」にあたります。第一、第二の教育は、選ぶ事が出来ませんが第三の地域での教育・拳法会は、自由に選択できます。現在の日本の若者に欠けているもの、それは、祖先が残してくれた精神的文化の欠如です。「武士道」は、己の心身を強化し我慢を重ねて調和をはかる。そして弱いものを守るための修行、惻隠こそ武士道精神の底辺を流れる心です。勝者が敗者を尊び、年少、軽輩を侮らず年長を尊ぶ。この心を大切にすることが誠の武士「サムライ」であり、信は万物の基を成すであります。

◇今後の展開について

視覚障害者の学生柔道大会は3回を数えます。これまで浜松で開催してきましたが、次回は岡山で開催される予定です。我々としてはこの浜松という慈愛にみちた町、市も僅かですが補助金をつけて後援してくれておりますし、市長も議員の方達も「又、戻ってきてくださいよ」とみんな応援してくれていますので、隔年で開催しようということも話し合われております。

もう1つ、私ども協会の大きな柱になってきましたのは、先ほど申し上げました空手の大会で優勝した北欧スウェーデンのポントス・ジョハンソンです。先生ご自身も障害者で車椅子での生活をしていましたが、武道である柔道と空手に接することによって、歩行が可能になりパラリンピックの水泳部門のメダリストになり、スウェーデンで国際障害者武道連盟を設立されました。また、私どもの顧問にもなっていていただいております。そういう関係で毎年スウェーデンに15名くらい研修生を出しています。

武道学会でも発表しておりますが、精神的な効果や自尊心が養われるといった効果をキチッと示していきたい。指導方法が現段階ではまちまちなので、それを理論的にマニュアル化をはかりたいと考えております。(文責・編集部)